

(別紙様式3)

## 博士論文要約 (Summary)

2021年入学

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻

氏名 石原 明子

|  |                         |
|--|-------------------------|
| タイトル   | 水俣のもやい直しの研究—修復的正義の歴史社会学 |
| <p>第一章 はじめに</p> <p>水俣では、水俣病公害事件等の経緯から、地域住民同士が複雑な加害被害の関係をもち、人間関係の分断や対立、葛藤を経験してきた。もやい直しは、1994年の水俣病犠牲者慰霊式で吉井正澄水俣市長（当時）が水俣地域住民の人間関係再構築を呼びかけるために用いた言葉で、現在では広く水俣における人間関係再構築の取り組みを指して用いられている。本稿ではもやい直し/「もやい直し」の二つの表記を用いたが、吉井が慰霊式で呼びかけた以降の具体的なそれについては「もやい直し」をいう表記を、水俣における人間関係再構築を広く一般に意味する場合にはもやい直しという表記を用いた。</p> <p>本研究の問題関心は、もやい直しの歴史的経緯を明らかにし、そのプロセス・手法・考え方について、紛争解決研究とくに修復的正義（zehr 2002; 他）の視点から意義づけを行うことである。修復的正義は「人間関係修復（restoration）」と「正義（justice）」を両立させ、起こった悲劇に向き合い、二度とそのような悲劇が起こらない未来を関係者が力を合わせて目指していくような人間関係再構築である。</p> <p>第二章 先行研究の検討</p> <p>研究の目的を明確化するために、本章では先行研究として、主に水俣病公害の側面に関する水俣研究史と、これまでの水俣研究におけるもやい直し研究を概観し、その蓄積と限界を明らかにした。もやい直しに言及する過去に出版された書籍や論文には、(1)もやい直しを推進した当事者による発表物、(2)もやい直し以外を主題とする論考の中でもやい直しに言及している文献、(3)もやい直しを第三者として研究し論じている文献の三種があるが、(2)の数に比べると(3)が各段に少なく、もやい直しは、水俣に関心をもつ専門家や市民によって期待をもって言及されることが多いが、それ自体を対象とした研究は限られていることがわかった。</p> <p>先行研究を総じると、「もやい直し」という言葉は、「舳い（船と船をつなぐ）」「もやい（催合い（地域の助け合い））」を「し直す」の意味の造語で、漁師で患者運動のリーダーであった緒方正人が最初に用いた言葉を活用する形で、吉井正澄市長（当時）が1994年5月の水俣病犠牲者慰霊式で、人間</p> |                         |

関係が分断していた水俣市民に向かい人間関係再構築を呼びかけるために用いた言葉であったが、必ずしもその概念の定義が明示化されていたわけではなかった（山田 1999; 他）。先行研究では共通して、もやい直しは第一義的には水俣地域住民の分断や対立からの「(a)人間関係再構築」を意味し、同時に「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」という価値共有の過程であること、が認識されていた（除本 2015,2016,2020; 山田 1999; 小松原 2016）。その意味でのもやい直しの取り組みは、吉井独自のものではなく、以前からの地域での種々の取り組みを吉井市長が「もやい直し」という言葉に集約して、さらなる推進を呼びかけたものである（山田 1999）。

上記の(a)(b)の意味におけるもやい直しの歴史的経緯については、1990 年代初頭から熊本県主導で取り組まれた「環境創造みなまた推進事業」が、のちの吉井市政での取り組みも含むもやい直しの機運を作り上げる大きな舞台となったとする認識が先行研究で共通していた（山田 1999; 除本 2015, 2016, 2020; 小松原 2016）が、「環境創造みなまた推進事業」のもとで行われた事業内容の具体的な内容や、その過程で誰と誰の人間関係がどのように再構築されていったのかの経緯は、先行研究では明らかにされていなかった。また「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」ということが、多くの住民が水俣病をタブー視してきた水俣においてどのように可能になっていったのかについても、その歴史的経緯は明らかにされていなかった。(a)と(b)を可能にした手法や理論に関しても、「祈り」を行政が導入したことに関する論考（小松原 2016）があったのみであった。もやい直しの成果については、「水俣・社会ネットワーク研究会」による 1999 年の市民意識調査の単純集計の公表（水俣・社会ネットワーク研究会 2004）と、吉井市長退任後に起こった「産業廃棄物最終処分場反対運動」の成功への言及（除本 2015, 2016; 小松原 2016）がある以外には、本格的な研究はなかった。

上記(a)(b)の要素は、筆者が関心をもち、加害被害関係や誰かが誰かを傷つけるということが起こった場合の紛争解決理論である修復的正義の考え方と通底している。「人間関係修復」「正義（公正さ）」の両立を目指す当該理論では、起こったことを忘れて水に流すことで関係者の人間関係を修復するのではなく、被害者の痛みに関係者が共に向き合い、被害者が痛みや損害から回復するための責任を加害者が取っていくことを求めているとする。

### 第三章 研究の目的と方法

本研究の目的は、(a)(b)の意味におけるもやい直しの歴史的経緯を明らかにし、もやい直しのプロセス、手法、考え方について、紛争解決研究の知見を用いてその意義を考察することである。特に(a)(b)の要素は修復的正義の考え方と通底することに着目して、考察を行っていく。

もやい直しの歴史的経緯については、もやい直しの関係者へのオーラルヒストリー調査を基に、文献や資料を再構成して研究する方法をとった。オーラルヒストリーの調査対象者は、吉井正澄の 1994 年の水俣病犠牲者慰霊式での式辞で「もやい直し」の言葉を用いることを提案し、当該取り組みに水俣市役所職員（当時）として中心的に取り組んだ吉本哲郎と、吉井正澄に聞き取りを最初に行い、その内容からスノーボール形式で聞き取り対象者を選定していった。吉井正澄と吉本哲郎以外に、森枝敏郎（熊本県庁職員(当時)）、金刺潤平（浮浪雲工房）、高木淳二（株式会社高木藤川設計事

務所)、吉永利夫(水俣病センター相思社職員(当時))に主にインタビューを行い、他に補足的に聞き取りを行った対象者もある。インタビューについては、ナラティブ・インタビューとエスノグラフィック・インタビューの混合法(フリック 2002)を用いた。

もやい直しのプロセス、手法、考え方についての紛争解決研究の知見による考察については、もやい直しが必要となった水俣地域の分断と対立の状況(第四章)について、そのコンフリクトの心理社会的メカニズムと構造を紛争解決研究の知見で分析し、そのメカニズムと構造に対応して、紛争解決研究の知見から想定される人間関係再構築の理論やモデルを検討し、その理論やモデルなどを基に、もやい直しの歴史プロセスを考察し、意義付けを行っていった(第九章)。

#### 第四章 もやい直し前史—水俣地域住民の分断と対立

本章では、のちにもやい直しを必要とすることとなった水俣地域における住民同士の分断と対立の歴史的経緯を、先行研究の知見を主に用いて整理した。明治初期までの水俣は、海沿いは製塩業、山沿いは農林業の農山漁村地域であった。水俣地域の近代化は、東京帝国大学で電気化学を専攻した事業家の野口遵が1907年に水俣沿岸部のカーバイド工場を開始し、1908年に日本窒素肥料株式会社(以下、社名は何度か変わるが、代表してチッソと表記する)を設立したことからはじまった(色川 1980; 高峰 2008; 他)。これにより工業都市となり、貨幣経済的にチッソに大きく依存する企業城下町となっていった。漁村では、明治期になると、天草からの移住漁民が増え、新住民は土着住民に対して「ながれ」などと呼ばれて差別的に扱われた(鶴見 1983)。のちに水俣病患者が多発する茂道、湯堂、出月などの集落は移住漁民が多い集落であった。

1932年からは、のちに水俣病の原因化学物質とわかるメチル水銀が途中で生成されるアセドアルデヒドの生産がチッソ工場が始まり、工場排水の海への放出も始まった。遡ること1923年には、水俣の漁業組合から、チッソ工場排水による漁業被害への補償要求が始まっている。チッソは朝鮮半島にも進出し、太平洋戦争以前には日本の新興15大財閥に数えられた。敗戦によって、朝鮮半島のチッソ工場の幹部社員が水俣に戻り、水俣工場の幹部となった(石田 1983)。1953年頃から、水俣の漁村で猫が狂い死にしている報道がなされ、1956年にのちに水俣病と名前が定着する「奇病」の患者が最初に保健所に報告された。この「奇病」は、患者が貧困でも無料で入院できるようにという意図もあり、法定伝染病として扱われはじめた(花田・原田 2012; 岡本 2015a)。このことがその後長期にわたり、実際には伝染しない水俣病が伝染病と人々に信じられ、患者や水俣住民が差別される土台となった。1959年には、熊本大学医学部とチッソ附属病院はそれぞれ、水俣病の原因がチッソの工場排水にあることを突き止めたが、国とチッソの判断で1968年まで隠蔽された(高峰 前掲書; 水俣病センター相思社 n.d.)。敗戦後の当時の日本で、唯一輸出できていた工業製品を生産しているのがチッソであり、チッソの存続が戦後日本経済発展にとって必要であると国が判断してのことであった。1968年に、技術革新でアセドアルデヒドを生産する必要がなくなると、国は水俣病がチッソの工場排水中のメチル水銀中毒症であったことを発表した。真の原因の隠蔽によって、地域内では伝染病患者としての患者への忌避と差別が、さらに水俣地域外の人たちから水俣出身者への差別が根付くこととなった。水俣地域の住民は、水俣地域外の人たちから結婚や就職で差別されて

いた。

地域住民同士の分断と対立が目に見える形で始まったのは、1962年のチッソの労働争議である安定賃金闘争からであった。これによって会社と対立する労組（旧労）に対して、会社の方針に理解を示す労組（新労）が形成され、旧労支持者と新労支持者の対立は、チッソ社員ではない地域住民をも含めて広がっていった(富田 2015)。さらに1968年以降は、旧労が水俣病公害における患者運動支援を表明し(石井 2015)、旧労と新労の対立が水俣病問題をめぐり、患者を救うかチッソを救うかという対立軸に発展していった。特に1971年には両者が新聞の折り込みビラで相手の立場を公に批判する「ビラ合戦」が繰り広げられ(岡本 2015b)、チッソ正面玄関前での座り込みや、水俣病第一次訴訟などの動きの中で、水俣病問題をめぐる対立が地域内で可視化されていった。これ以外に、患者団体同士の対立もあった。

このように、水俣地域では、地域内では住民同士が対立し、水俣地域住民は水俣外の人々から差別されるという構造が長く続いた。

## 第五章 もやい直し萌芽期—1980年代を中心に

第五章から第七章が本研究における歴史研究の主要部で、もやい直しに関するオーラルヒストリー調査とそれを裏付ける文献・資料調査で歴史を再構成した部分である。第五章は、1980年代を中心とする「もやい直し萌芽期」である。1980年代には、「(a)人間関係再構築」「(b)水俣病に向き合い、負の体験を未来に活かす」という意味でのもやい直しが、具体的に取り組みされたわけではないが、そこに向かう重要な準備、もやい直しを可能にしていく(1)思想的成熟、(2)人的ネットワークの形成が進んでいた。

思想的成熟については、1990年代に行政にも大きな影響を与えていく患者リーダーの緒方正人や杉本栄子の「招待的赦し(invitational forgiveness)」(Govier and Hirano 2008)に向けての思想的転回と成熟が起こっていた。緒方は「狂いの体験」を経て「チッソは私であった」という境地に達し(緒方 2020; 他)、杉本は父親からの「水俣病のはさき(天からの恵み)」という言葉に向き合い続けた(西山 2004; 他)。水俣病の加害被害を「チッソ」対「患者」あるいは「行政」対「患者」といった二項対立でとらえて、一方的に加害者を責めるのではなく、水俣病は人間の罪で責任であり、チッソや行政に対し「赦す」、だから「どうか共に水俣病をめぐり人間の罪と責任に向き合ってほしい」(緒方・辻 1996; 他)という「招待的赦し」の問いかけやメッセージは、1990年代のもやい直しの精神的土台となっていた。「赦す」は「(a)人間関係再構築」の精神的土台で、「どうか共に水俣病をめぐり人間の罪と責任に向き合ってほしい」というメッセージは「(b)水俣病に向き合い、負の体験を未来に活かす」の前半部分に関する呼びかけである。また、相思社も、患者支援団体として行政やチッソと闘いつつ、一方で、水俣病の教訓を生かした未来の在り方「もう一つのこの世」づくりの考え方を進め(遠藤 2021)、1982年には文明技術に頼りすぎない生活を重視し患者と共に生きる「生活学校」を開始し(水俣病センター相思社 2004a)、金刺潤平などの次世代のリーダーを生み出した。そのころ患者の中でも、水俣病の教訓を生かして、無農薬柑橘づくりなどが始まっていた。これは「(b)水俣病に向き合い、負の体験を未来に活かす」に関する思想や行動といえる。また吉井

正澄は、1975年に水俣市議会議員に当選後、水俣病問題をめぐる分断と対立を経験しながらその問題構造を独自に分析し、全国市議会議長会の公害対策特別委員会委員長の経験なども経て知識を蓄積し、水俣病問題の本質や解決策の見極めをし、(a)と(b)の両方の意味での「もやい直し」に向けた思想的・知的な準備作業を進めていた(吉井 1986, 2017; 他)。

1980年代の人的ネットワークの形成については、第一に、患者支援者の金刺潤平が、水俣病や患者運動を嫌っていた地域のリーダーや、患者と触れることがなかった一般地域住民と、人間関係を構築していった(金刺インタビュー)。このことは「(a)人間関係の再構築」としてのもやい直しが1980年代に始まっていたことを示している。「(b)水俣病に向き合い、負の体験を未来に活かす」に向かっていくための人的ネットワークも形成されていった。水俣市役所職員の吉本哲郎が、日本のマーケティングのリーダーである今井俊博や藤原肇、そして住民参加型でワークショップ等を用いたまちづくりや建築設計を進める延藤安弘や高木淳二らと出会い、彼らを通じて環境、住民参加型、対話、マーケティングといった新しい価値を知り、水俣病に向き合った先にどのような未来がありえるのかについて具体的なイメージを得ていった(水俣農業祭実行委員会 1986; 吉本 1995, 2008, 2018; 水俣市 1987, 1988a, 1988b, 1989; 1991)。この人的ネットワークは1990年代の具体的な事業や取り組みを担う土台となった。

第六章 もやい直しの急速発進期—環境創造みなまた推進事業の前半期(1990年度から1994年1月まで)

第六章では、1990年代から1992年1月(吉井市長誕生以前)までを、「もやい直しの急速発進期」として論じた。1990年代に入ると、水俣のヘドロ埋立地の活用をめぐり熊本県による「環境創造みなまた推進事業」が本格的に開始され、その事業を通じて「(a)人間関係再構築」「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」の2つの意味におけるもやい直しの取り組みが急激に始まっていた。

「環境創造みなまた推進事業」において、当初は県は、埋立地においてイベントをすることなどによる地域活性化を考えていた(山田 1999)が、緒方正人らからの批判と問いかけで(緒方・辻 1996; 他)、1990年秋以降に方針転換をしていった。具体的には、当該事業を担当する県と水俣市の職員が中心となりながら、水俣地域で対立する立場のリーダーを直接訪ね、関係性を築き、問題を整理していった(鎌倉 1992)。県の担当室長である鎌倉孝幸らは「水俣の住民相互間の理解が乏しく、非難と中傷が定着」していることに驚き(同文献)、まちづくりの前提として地域住民の「地域社会の総意づくり」が必要とし、「分断・対立から相互理解へ」((a)に相当)や「水俣病問題の解決なくしては地域の再生は困難」「水俣病問題は地域全体の問題」「水俣病の教訓を生かしていくことが水俣の責務」((b)に相当)ということをし、水俣地域再生ビジョンにした(環境創造みなまた実行委員会 1992; 水俣市・熊本県水俣振興推進室 1993)。事業を通じて多大なる「ひと・もの・かね」の資源投入がなされたことで、水俣地域は急激に大きく変化し始め、対立してきた立場のリーダーたちの新しい出会いや出会い直しが多く起こった。1991年に熊本県職員の鎌倉孝幸らと政治リーダーの吉井正澄(吉井 前掲書 2017)、1992年2月に水俣市行政職員の吉本哲郎と患者リーダーの杉本栄子・雄(吉本

1995; マインド 1995)、1992年に吉井とチッソ擁護派の自民党議員(吉井 前掲書 2017)、1993年3月に吉井と杉本(同書)、1993年晩秋に吉本ら行政職員と相思社職員ら(吉本インタビュー; 他)など、出会い、出会い直し、関係構築、合意形成(価値共有)などが、「環境創造みなまた推進事業」の内外で、時に激しくぶつかりながらも起こっていった。

1991年の「産業、環境及び健康に関する水俣国際会議」(国際連合大学・水俣市・熊本県 1991)では、県からの強い要請で市議会議員だった吉井が登壇し、以降、吉井が水俣病問題の表舞台で政治的リーダーシップをとっていくこととなった(吉井 前掲書 2017; 他)。「子供たちにつなぐ水俣を語る市民の集い(1992年)」「環境国際フォーラム:地球環境を考える一流域生態系の視点から(1992年)」「産業による環境破壊と地域社会の対応に関する水俣国際会議(1992年)」などの多くのイベントは、対立してきた立場のリーダーたちが、公的場面で同席し意見を交換する機会となった(環境創造みなまた実行委員会 1993, 1994, 1995a, 1995b, 1999; 環境創造みなまた推進委員会)。「市民講座」では、地域住民の前で公に水俣病の体験が語られる機会が設けられた(環境創造みなまた実行委員会・水俣市 1993, 1994, 1995)。1993年には吉井のリーダーシップで、市長を会長として、患者11団体を含む194団体・個人が参加した「市民の会」が発足した(吉井 前掲書 2017)。そして私的活動ではあるが、相思社と行政のリーダーらが共に水俣病や水俣地域について議論する「水俣研究会」が開始された(山田 前掲論文; 水俣研究会 1994)。

これらの動きの背景には、患者である緒方や杉本らの「招待的赦し」の思想と行動があった。また水俣では地域全体を「海(海沿い)」「山(山間部)」「街」に分けて考える傾向があるが、水俣病をめぐる「街の人」と「海の人」の対立構造において、「山の人」である吉井や吉本が「海の人」である緒方や杉本などと出会っていく中で、「山の人」が調停人や仲介人などの第三者役割になっていった点も注目に値する。

## 第七章 「もやい直し」の普及期—吉井正澄市政の誕生から終了まで

「環境創造みなまた推進事業」の1990年代前半の動きの中で水俣病からの地域再生における政治的リーダーシップを発揮し始めていた吉井正澄が、1994年2月の水俣市長選挙で当選した。第七章では、吉井市政の時期(1994年2月から2001年2月)を「もやい直しの普及期」として論じた。吉井は市長に当選後すぐに市内の16団体以上の患者団体を訪ね歩き、意見を聞き交換した(吉井 前掲書 2017)。そして5月の水俣病犠牲者慰霊式で、行政の長として初めて水俣病問題に関して「公式謝罪」をし、命の犠牲と分断という悲劇を教訓に「環境や健康」を大切にす地域づくりをするために、市民が心寄せ合う「もやい直し」を呼びかけた(同書など)。吉井はそれまで、人間関係の再構築を「内面社会の再構築」と表現していたが、式辞の原案を作成した水俣市役所職員の吉本哲郎が、緒方正人が用いていた「もやい直し」という言葉を援用して言い換えた(吉本 2018; 他)。「もやい」は「船をつなぐ縄(舳い)」と地域で共同して仕事をする「催合い」の2つの意味があり、それをし直すという意味である。

吉井市政においては、水俣病資料館に語り部制度の設立、市民が協働して行う水俣病に犠牲になったいのちへの祈りを捧げるの「火の祭り」の開始、「市民の会」による国への共同陳情、その成果

でもある 1995 年 12 月の国による水俣病政治解決、もやい直しセンター建設ワークショップ、本願の会による埋立地への石像（野仏）の設置の開始、実生の森づくり、環境モデル都市への諸制度・取り組みづくり（ごみ減量女性連絡会議、環境マイスター制度の創設等）、水俣病を学ぶ教育旅行の誘致などの取り組みがなされた（（吉井 前掲書 2017; 上田 2021; 環境創造みなまた実行委員会 1999; 吉本 前掲資料 2018; 藤崎 2013; 下田 2017; 吉本インタビュー; 金刺インタビュー; 高木インタビュー; 他）

吉井市政の時期の特質は、(1) 1990 年代前半の「人間関係の再構築(a)」が対立する立場のリーダーレベルでのそれであったのに対して、吉井市政では、より一般住民間の「人間関係の再構築(a)」が意識されたこと、(2) 「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」のビジョンとしての環境モデル都市づくりに向けて具体的な制度づくり等に力が入られたこと、(3) 祈りに関する取り組みが明確に意識されていったこと、などがある。吉井は、のちの著書『じゃなかしゃば』(2017)において、もやい直しとは何であるのかについて論じており、その具体例として、国への共同陳情、もやい直しセンター建設ワークショップ、実生の森づくり、ごみのリサイクル分別活動などをあげている。人間関係再構築自体を目的にするよりも、何か別の目的をもって共に活動する場をもつことで、様々な立場の市民同士が語り合う機会が自然に確保され、人間関係の再構築が促進されていった。環境モデル都市づくりに向けた具体的な活動や制度作りも進められ、多様な立場の市民が共に活動する場としても機能した。また、吉井市政の時期には、埋立地の祈りの石像（野仏）を設置しようとする本願の会が田上義春、濱元二徳夫妻、杉本栄子夫妻、緒方正人、佐々木清登、石牟礼道子らによって設立され、実際の設置が開始され、火の祭りの立ち上げ期の数年において重要な役割を果たした(石牟礼 1998; 下田 前掲書; 本願の会 1998; 他)。「環境創造みなまた推進事業」は、1995 年度からは本格的に熊本県から水俣市・水俣市民に主導が移ったが、それに際しての県による水俣地域再生のビジョンにまとめにも、祈りや慰霊が強調されている(マインド 1995)。

吉井の「もやい直し」の思想には、現代の紛争解決研究による紛争解決理論にも適った考え方が多くみられた。そのように発想するに至った背景には、農民として育った吉井の「農の思想」があった(吉井インタビュー)。

## 第八章 もやい直しのゆくえー吉井市長退任から現在までの水俣(2001 年 2 月から現在)

本研究における歴史研究の主たる対象時期は、第五章のもやい直し萌芽期から第七章の吉井市政の時期までであるが、もやい直しの到達点と限界点を評価する意図も含めて、第八章では、吉井市政退任後から現在までのもやい直しに関連する状況を、文献や筆者の参与観察研究の結果を用いて概観した。

吉井市長退任後には、吉井市政で蒔かれた「もやい直し」の種が、芸術を通じた祈り、チッソへのもやい直しの誘い、産業廃棄物処分場建設阻止活動、患者や患者家族の第二世代リーダーの出現などの形で育ち、展開されていった。2004 年には、石牟礼道子が書いた能「不知火」(石牟礼 2013)の奉納(上演)が水俣の埋立地で行われ、緒方正人らが中心になって加害企業のチッソにも参加を呼びかけ、準備が進められた(本願の会(2004a, 2004b, 2004c))。1990 年代のもやい直しで課題として残

っていたチッソとのもやい直しに、緒方らが一步踏み出したものであった。また、2004年から2008年にかけては、水俣市内に建設が計画された産業廃棄物処分場建設阻止の市民運動が起り、もやい直し以前には対立関係にあった多様な立場の住民の共闘によって、建設が阻止された(産廃記録誌編集委員会 2009; 水俣の命と水を守る市民の会 n.d.)。また 1990年代までに患者運動の中で主要な役割を果たした世代の次世代の患者・患者家族リーダーが出てきた。緒方正人の甥にあたる緒方正実の水俣病の認定をめぐり10年に及ぶ独自の闘いを展開し、認定後は、水俣市立水俣病資料館の語り部活動や祈りのこけしの活動を通じて、行政、社会、チッソにも影響を与え続けている(緒方 2013; 2016)。杉本栄子の長男の杉本肇は、青年期には水俣病の問題と距離を置いてきたが(藤崎 2013; 他)、母・栄子の他界を機に2008年から水俣市立水俣病資料館の語り部となったほか、兄弟や親せきとお笑い音楽バンド「やうちブラザーズ」を結成し、それを通じた新しいもやい直しを展開している(杉本 2016)。また2010年頃から2015年頃にかけては、水俣市内の若手市民を中心とする異業種交流グループ「あばあこんね」が積極的な活動をした。もやい直し以前の時代に親たちが対立関係にあった若手世代が、親の時代の対立を越えて、水俣病の負の経験をプラスの価値に変えて、環境や健康を志向した地域や商品づくりに共に取り組んだ(水俣市 2014)。国立水俣病総合研究センターの原田利恵らによるむつかどラボ活動(水俣市 2012)、参加型ダンスワークショップ(Kasai et al. 2023)、筆者による修復的な出会いの場の創出(石原 2022)などの活動も、新しいもやい直しのプロジェクトといえる。

吉井市政までのもやい直しの成果はどう評価できるか。分断と対立は解消されたのだろうか。「水俣・社会ネットワーク研究会」が1999年初頭に行った「もやい直し」に関する水俣市民意識調査の単純集計結果が公表されており、それによれば、「環境創造みなまた推進事業」は、人間関係の再構築や水俣病をタブー視しない地域づくりに向けて一定の効果をもったが、一方で、その時点でも「水俣市に「もやい直し」が必要だ」と考えている市民も多かった(55.8%) (水俣・社会ネットワーク研究会 2004)。また2009年より水俣市に断続的に住んでいる筆者の参与観察によれば、より高齢の世代の水俣地域住民においては今も水俣病患者の存在や地域としての水俣病の経験をタブー視する感覚は強く、反対に1990年代以降に小中学校の教育を受けた若い世代では、よりタブー視する感覚は少なく、水俣病の経験を地域の価値として環境都市に向かおうとする思いが強いように感じられた。ただし現在の水俣では、もやい直しの揺り戻しも起こっており、2018年からの高岡利治市政では、「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」という方針ではなく、水俣病のその経験に向き合ったり、生かしたり、継承することは、吉井市政時に比べると、否定的に捉えられている。

## 第九章 考察—紛争解決研究の知見を用いて

第九章では、第五章から第七章で明らかにしてきたもやい直しの歴史的経緯について、通史的考察と紛争解決研究の知見による意義付けを行った。まず、第五章から第七章の時期を通史的に見たときに浮かび上がるもやい直しの全体像を考察した(第九章第一節)。次に、紛争解決研究の知見を用いて、もやい直しのプロセス、手法、考え方に関する意義付けを行った(第九章第二節と第三節)。第九章第二節と第三節では具体的には、最初に水俣の分断や対立のコンフリクト構造(心理社会的



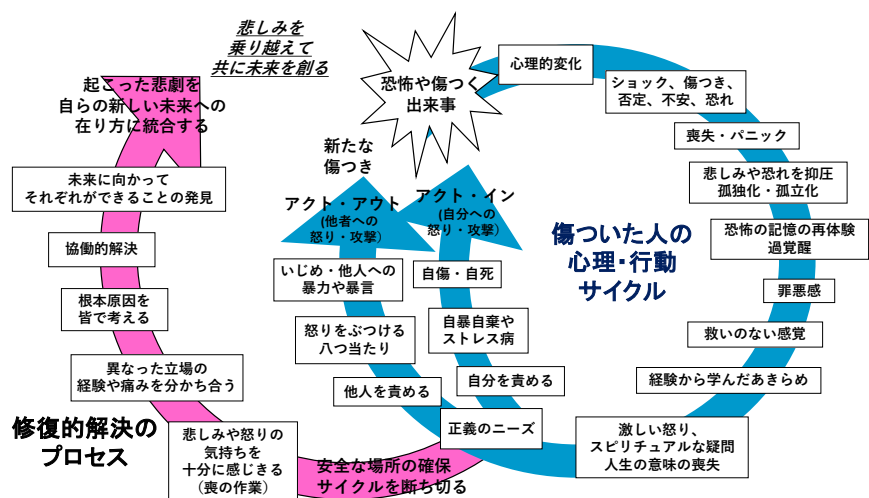
メカニズム)を分析し、それに対する人間関係再構築の理論やモデルを紛争解決研究の知見から提示した。そしてその理論やモデルを基に、もやい直しの歴史プロセスや手法や考え方について、紛争解決研究の知見から意義づけした。

第一節のもやい直しの全体像に関する第五章から第七章までを通史的に見ることによる考察であるが、「(a)人間関係の再構築」の経緯については、1980年代後半から1990年代前半にかけて、対立していた各立場の主なリーダーたちの出会い直しがあり、吉井市政を含む1990年代後半には、むしろ一般市民の人間関係再構築に力が入れられていったと整理できた。「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に活かすこと」については、今回の調査の範囲で最も早い萌芽は、1974年の相思社の設立趣旨や、1979年に患者による無農薬柑橘栽培を組織化した反農薬水俣袋地区生産者連合(反農連)(1979年)であった。行政や患者以外の水俣市民たちの中では、水俣市都市計画課での吉本哲郎らの動きを基盤として、1986年の水俣農業祭以降に、水俣外のビジネスや建築リーダーから「環境」「対話」といった価値が導入され、水俣病の経験を環境というプラスの価値に変えていく機運ができていった。

次に、もやい直しのプロセス、手法、考え方に関する紛争解決研究の知見を用いた意義付け(第九章第二節と第三節)についてであるが、まず、水俣の分断や対立のコンフリクト構造(心理社会的メカニズム)を紛争解決研究の理論を用いて分析したところ、水俣の分断や対立は、「傷ついたコミュニティ(Yoder 2005; 石原・岩淵・廣水 2012)」「複層的で包含的な住民間の加害被害関係」「関係者の力の非対称・構造的暴力(Galtung 1969)」という3つ特質をもつことがわかった。これらの特質に対応する紛争解決モデルとして、トラウマの連鎖からの脱却と修復的正義を組み合わせた「修復的解決モデル」(Yoder 2005; 石原・岩淵・廣水 2012)と「カールの非対称コンフリクト変容モデル」(Curle 1971)、さらにそれらを組み合わせた「傷ついたコミュニティの再生の取り組みモデル」を提示した。このモデルを用いて、「もやい直し」等の歴史的経緯について考察を行うならば、もやい直し以前の、裁判も含めた水俣病患者運動は、

「カールの非対称コンフリクト変容モデル」で意義付けすることができ、もやい直しのプロセスや考え方は右図の「修復的解決モデル」を用いて意義づけることができた。特に吉井正澄市長による1994年の水俣病犠牲者慰霊式での式辞は、「修復的解決モデル」に合うメッセージ構造をもっていた。また水俣でのもやい直

図 修復的解決モデル



Yoder(2005)、石原・岩淵・廣水(2012)を筆者が改変

しにおける諸事業や取り組みは、内戦地等の再生にも活用できる「傷ついたコミュニティの再生の取り組みモデル」に一致するものであった。しかし地域住民一人一人が、これらの事業によって修復的正義にかなう内発的な変容をしていたか、すなわち互いの痛みを理解したうえでその悲しみが二度と起こらない共に未来を作ろうと内発的に思っていたかという点、必ずしもそうではなかった。中には、以前は水俣病に距離を置いていた住民の中でも、水俣病患者の苦難や悲しみを知り、涙して、二度と悲劇が起こらない未来づくりをしようと内発的な変化をしていった者もいたが、一方で、リーダーが「環境が大事」といったからついていったというだけで、水俣病に向き合うということには未だ距離をもち、水俣病患者の存在や地域としての水俣病の経験をタブー視する感覚は強くもつ住民も今も残っている。

このことから、もやいの直しを「(a)人間関係再構築」「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」の二つの構成要素から考えるだけでは、修復的正義の視点からもやい直しの意義を分析するには不十分であるとの結論にも至った。これまでの水俣研究や実践では、水俣地域住民の心の傷、彼らはなぜ患者を差別し、患者運動に対立するようなことに追い込まれて行ったのかについての分析と共感が十分になされてこなかった側面がある。それを受けて本研究では、特に(b)を「(b1)水俣病に向き合い」「(b2)負の体験を未来に活かす」に分けて考え、かつ、(b1)は「(b1-1)水俣病患者の痛み(病の苦しみ、差別等の苦しみ・悲しみ)に向き合う」と「(b1-2)水俣地域住民が抱えてきた痛み(水俣に生まれたというだけで、差別される苦しみ・悲しみ)向き合う」に分けて構成要素を設定し考えていく必要性を、今後の研究と実践上の課題として、考察の最後に提案する。その観点で歴史経緯を分析していくと、これまでのもやい直しの実践は、(b1-1)や(b2)には主に焦点を当ててきたもので、(b1-2)が不十分であったとも考えられるなど、修復的正義としてのもやい直しの意義についてより厳密な分析が可能になる。

また、もやい直しのプロセスには、これら以外の紛争解決理論や概念で意義付けられる取り組みや出来事も多くあった。リーダーから一般住民たちへ(key people approach)(Schirch 2013)、本音をぶつけ合い理解することの大切さとそのための工夫(Amstutz 2009; Beer et al. 1997; Bush et al. 2004 など)、接触理論と信頼関係形成(building trust (Deutsch and Coleman eds. 2000)、招待的赦し(invitational forgiveness)、紛争解決における第三者役割、ニーズ論などの各理論で意義付けが可能であった。

## 第十章 結論

「(a)人間関係の再構築」「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に活かすこと」という二つのファクターで表現できるもやい直しについては、これまで一般には、吉井正澄による「もやい直し」の呼びかけとして知られ、先行研究ではそれに先立つ「環境創造みなまた推進事業」の役割が指摘されてきたが、本研究による関係者へのオーラルヒストリー調査とそれに関する文献調査の結果、1980年代に重要な萌芽的な動きが生まれていたことがわかった。本研究の成果として、1980年代を「もやい直し萌芽期」、1990年代から環境創造みなまた推進事業の前半(特に吉井市政誕生以前)を「もやい直し急速発進期」、吉井市政の時期を「もやい直し普及期」とする歴史観を提案したい。

水俣では、吉井や「環境創造みなまた推進事業」の担当行政職員らのリーダーたちは、修復的正義そして「修復的解決モデル」に一致した考え方をもち、各事業等を通じて、地域として水俣病の経験に向き合い、互いの痛みを理解し、二度と悲劇が起こらない未来づくりを共にしていこうという呼びかけや事業そして取り組みを行ってきた。その取り組みと思想には、修復的正義や「修復的解決モデル」以外の紛争解決研究の理論や概念に一致することも多くあった。一方で、地域住民個々人のレベルでは、修復的正義にかなう内発的な変化が起きていたかという点、必ずしもそうとはいえなかった。

その結果、本研究では、修復的正義の視点からもやい直しの意義を分析するには、先行研究を参考に研究の当初に設定した二つの構成要素「(a)人間関係再構築」「(b)水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」で分析するだけでは不十分で、特に(b)を、「(b1) 水俣病に向き合い」「(b2)負の体験を未来に活かす」に分けて考えるべきであり、かつ、(b1)は「(b1-1) 水俣病患者の痛み（病の苦しみ、差別等の苦しみ・悲しみ）に向き合う」、「(b1-2) 水俣市民が抱えてきた痛み（水俣に生まれたというだけで、差別される苦しみ・悲しみ）向き合う」に分けて構成要素を設定して分析することが必要であるとの結論にも至った。この視点を用いた本格的な歴史分析は今後の課題であるが、本研究から見える範囲でその観点から振り返ると、これまでの水俣研究やもやい直しの実践では、十分ではないものの患者の苦難への理解に焦点を当ててきたものが多く、一方で患者を差別し中傷した住民の背景にある傷つきすなわち水俣住民や水俣出身であるだけで受けてきた差別による傷つきには十分に焦点を当てられてこなかった。後者にも焦点をあてていくということが、今後の水俣研究そしてもやい直し実践での残された重要な課題の一つと考えられた。そのことにより、水俣住民は水俣病の経験をタブー視する感覚から解放され、より多くの水俣住民や社会のステークホルダーが参画して水俣病公害の不正義と悲劇から学びより良い未来づくりをしていくという、よりダイナミックな修復的正義のプロセスを実現していくことにつながると期待できる。

<主な参考文献（本要約で言及したもののみ）>

Amstutz, Lorraine S., 2009, *Little Book of Victim Offender Conferencing: Bringing Victims And Offenders Together In Dialogue*, Good Books

Beer, Jennifer B., Eileen Stief and Friends Conflict Resolution Programs, 1997, *The Mediator's Handbook*, Gabriola Island : New Society Publishers.

Bush, Robert A. Baruch, and Joseph P. Folger, 2004, *The Promise of Mediation: The Transformative Approach to Conflict*, Jossey-Bass

Curle, Adam, 1971, *Making Peace*, Tavistock Publications Ltd

Deutsch, Morton, and Peter T. Coleman, eds., 2000, *The Handbook of Conflict Resolution: Theory and Practice*, Jossey Bass.

遠藤邦夫, 2021, 『水俣病事件を旅する——memories of an activist』国書刊行会.

フリック,ウヴェ, 2002, 『質的研究入門<人間の化学>のための方法論』小田博・山本則子・春日常・宮地尚子訳, 春秋社

- 藤崎童士, 2013, 『のさり——水俣漁師、杉本家の記憶より』 新日本出版社
- Galtung, Johan, 1969, "Violence, Peace, and Peace Research". *Journal of Peace Research*, 6 (3):167-191.
- Govier, T. and C. Hirano, 2008, "A conception of invitational forgiveness," *Journal of Social Philosophy*, 39(3):429-444.
- 花田昌宣・原田正純編著, 2012, 『水俣学講義 第5集』 日本評論社.
- 本願の会, 1998, 『魂うつれ』 1号
- 本願の会, 2004a, 『魂うつれ』 17号
- 本願の会, 2004b, 『魂うつれ』 18号
- 本願の会, 2004c, 『魂うつれ』 19号
- 色川大吉, 1980, 『不知火海一調査団員の証言 水俣——その差別の風土と歴史』 反公害水俣共闘会議事務局.
- 石田雄, 1983, 「水俣における抑圧と差別の構造」『水俣の啓示(上)』(色川大吉編), 筑摩書房, 41-90.
- 石原明子, 2022, 「加害者とは誰か? ——水俣病や福島をめぐる加害構造論試論」『現代思想』50(9): 193-206.
- 石原明子・岩淵泰・廣水乃生, 2012, 「震災対応と再生にかかる紛争解決学からの提言」『将来世代が苦の構想』高橋隆雄編、九州大学出版会, 145-180
- 石井まこと, 2015, 「水俣病問題に向き合う労働組合の成立と労使関係史上の意義——漁民紛争・安賃闘争から恥宣言に至る『空白の8年』をふまえて」『大原社会問題研究所雑誌』法政大学大原社会問題研究所, 676: 19-32.
- 石牟礼道子, 1998, 「たとえひとりになっても」『魂うつれ』本願の会, 1: 2-3.
- 石牟礼道子, 2013, 「新特選『不知火』オリジナル版」『石牟礼道子 全集 不知火 第十六巻』
- 鎌倉孝幸, 1992, 「『私と水俣』のパースペクティブ——水俣の復権」『ごんずい』一般財団法人水俣病センター相思社, (13): 6-7.
- 環境創造みなまた実行委員会, 1992, 『環境・創造・みなまた'92 いま水俣は新たな時を刻む 環境聖地創造——海よふるさとよ甦れ』水俣市地域開発課.
- , 1993, 『海よふるさとよ甦れ——水俣地域環境再生・創造ビジョン調査から』熊本県・水俣市.
- , 1994, 「水俣病は私の守り神 語り手: 杉本栄子」環境創造みなまた実行委員会・水俣市『平成6年度環境創造みなまた推進事業 水俣病を語る市民講座報告書——もっと知ろうよ水俣病』水俣市.
- , 1995a, 『海よふるさとよ甦れ——環境ふれあい in みなまた報告書』水俣市.
- , 1995b, 『環境ふれあい in みなまた報告書——心の和、いまよりもっと 海よふるさとよ甦れ』水俣市.

- , 1999, 『海よふるさとよ甦れ——環境創造みなまた推進事業総括報告書（平成2年度～平成10年度）』水俣市.
- 環境創造みなまた実行委員会・水俣市, 1993, 『平成5年度環境創造みなまた推進事業 水俣病を語る市民講座——来て、聞いて、語ってみませんか報告書』水俣市.
- , 1994, 『平成6年度環境創造みなまた推進事業 水俣病を語る市民講座報告書——もっと知ろうよ水俣病』水俣市.
- , 1995, 『平成7年度環境創造みなまた推進事業 水俣病を語る市民講座報告書——水俣ドイツ 御所浦』水俣市.
- 環境創造みなまた推進委員会, 1992, 『子供たちにつなぐ水俣を語る市民の集い報告集』水俣市.
- Kasai, Aya, Philipee Chehere, Rie Harada, Nonoko Kameyama, and Julie Salgues, 2023, La danse du détour: A collaborative arts performance with people touched by Minamata disease, *Journal of Applied Arts & Health*, Volume 14 Number 2:207-225.
- 国際連合大学・水俣市・熊本県, 1991, 「産業、環境及び健康に関する水俣国際会議 プログラム」
- 小松原織香, 2016, 「水俣の祈りと赦し——1990年代の『もやい直し』事業を再検討する」『現代生命哲学研究』大阪府立大学 21世紀科学研究機構環境哲学・人間学研究所, 5: 51-73.
- マインド, 1995, 『みなまた——対立から、もやい直しへ』. マインド（環境創造みなまた委員会協力）
- 水俣病センター相思社, 2004a, 『もう一つのこの世を目指して——水俣病センター相思社30年の記録』.
- , 2004b, 『Illustrated Minamata Disease 絵で見る水俣病[改訂版]』世織書房
- 水俣病センター相思社, n.d., 「水俣病関連 詳細年表」  
[https://www.soshisha.org/jp/about\\_md/chronological\\_table](https://www.soshisha.org/jp/about_md/chronological_table)（最終閲覧：2023年10月15日）
- 水俣研究会, 1994, 「水俣研究会の記録」 遠藤邦夫・吉本哲郎氏提供
- 水俣の命と水を守る市民の会, 発行年不明, 『産廃阻止に立ち上がった水俣市民 絆 水俣の命と水を守る市民の会記念誌』
- 水俣農業祭実行委員会, 1986, 『拓こう興そう農業から 未来をのせてカルチャートレイン'86 水俣農業祭』水俣市.
- 水俣市, 1987, 『水俣 HOPE 計画シンポジウム——見て！聞いて語り合おう これからの住まい 昭和62年1月22日（金）』.
- 水俣市, 1988a, 『なごみともやいの住まいづくり概要版——水俣市地域住宅計画』
- 水俣市, 1988b, 『なごみともやいの住まいづくり——水俣市地域住宅計画』
- , 1989, 『昭和63年度 HOPE 推進事業 水俣の建築紹介——住宅編』.
- , 1991, 『なごみともやいのすまいづくり——こんな町にこんな家にすみたいナ』.
- 水俣市・熊本県水俣振興推進室, 1993, 「環境創造みなまた推進事業（平成2～4年度）総括報告」相思社所蔵資料

- 水俣市, 2012, 「平成 23 年度 水俣市内商店街における事業主の現状報告—集計報告」  
(原田利恵提供資料)
- 水俣市, 2014, 『水俣にこの人あり vol.74 まちおこしグループ あばあこんね』広報みな  
また 2014.Jan.no.1289
- 水俣・社会ネットワーク研究会, 2004, 「『水俣・芦北地域における地域社会再生に関する研究』  
報告書」丸山定巳・田口宏昭・田中雄次・慶田勝彦編『水俣の経験と記憶—問いかける水  
俣病』熊本出版文化会館, 231-279.
- 緒方正実, 2013, 『緒方正実 水俣病認定後の闘いの記録 2007-2013』緒方正実  
緒方正実著・阿部浩, 久保田好生, 高倉史朗・牧野喜好編, 2016, 『水俣・女島の海に生きる—  
わが闘病と認定の半生』世織書房.
- 緒方正人, 2020, 『チッソは私であった—水俣病の思想』河出書房新社.
- 緒方正人, 辻信一, 1996, 『常世の舟を漕ぎて—水俣病私史』, 世織書房.
- 岡本達明, 2015a, 『水俣病の民衆史 第 2 巻—奇病時代』日本評論社.  
———, 2015b, 『水俣病の民衆史 第 4 巻—闘争時代 (下)』日本評論社.
- Ramsbotham, Oliver, Tom Woodhouse and Hugh Miall, 2011, *Contemporary Conflict Resolution*, 3rd  
ed., Cambridge : Polity Press.
- Schirch, Lisa, 2013, *Conflict Assessment and Peacebuilding Planning: Toward a Participatory  
Approach to Human Security*, Kumarian Press
- 杉本肇, 2016, 「水俣を伝える」栗原彬編『ひとびとの精神史 第 9 巻 震災前後—2000 年以降』  
岩波書店, 347-364.
- 高峰武, 2008, 『水俣病小史』熊本日日新聞社.
- 鶴見和子, 1983, 「多発部落の構造変化と人間群像—自然破壊から内発的発展へ」色川大吉編『水  
俣の啓示—不知火海総合調査報告 上』筑摩書房, 157-終ページ.
- 上田敬祐, 2021, 「水俣再生に向けた水俣市の取組」  
[http://nimd.env.go.jp/kikaku/docs/nimd2021\\_10.pdf](http://nimd.env.go.jp/kikaku/docs/nimd2021_10.pdf) (最終閲覧日 2023 年 10 月 17 日)
- 山田忠昭, 1999, 「『もやい直し』の現状と問題点 (特集 水俣病問題の政治解決)」『水俣病研  
究』水俣病研究会, (1): 31-44.
- Yoder, Carolyn, 2005, *The Little Book of Trauma Healing: When Violence Strikes and Community  
Security is Threatened*, Intercourse : Good Books. (Chapter 4 の邦訳は、石原明子訳, 2016,  
「キャロライン ヨダー著『トラウマの癒し : 暴力が襲い、コミュニティの安全が脅かされ  
たとき』第 4 章 癒されないトラウマの連鎖サイクル」『文学部論叢』熊本大学文学部, 107:  
105-117. Chapter5 の邦訳は、石原明子訳, 2017, 「キャロライン ヨダー著『トラウマの癒  
し : 暴力が襲い、コミュニティの安全が脅かされたとき』第 5 章 連鎖サイクルを断ち切る :  
トラウマからの回復と癒し、そして安全」『熊本大学文学部論叢』熊本大学文学部, 108: 139-  
156. )

除本理史, 2015, 「公害被害地域の再生に関する一試論——水俣『もやい直し』再考」『経営研究』66(3): 31-48.

———, 2016, 『公害から福島を考える——地域の再生をめざして』岩波書店.

———, 2020, 「現代資本主義と『地域の価値』——水俣の地域再生を事例として」『地域経済学研究』38(0): 1-16.

吉井正澄, 1986, 『議員人生あれこれ』発行者: 吉井正澄

———, 2017, 『「じゃなかしゃば」新しい水俣』藤原書店.

吉井正澄(述)・進藤卓也著, 2002, 『奈落の舞台回し——前水俣市長吉井正澄聞書』西日本新聞社.

吉井正澄・上甲晃, 2004, 『対談 気がついたらトップランナー——小さな地球 水俣』燦葉出版社.

吉本哲郎, 1995, 『わたしの地元学——水俣からの発信』NECクリエイティブ.

———, 2008, 『地元学をはじめよう』岩波書店.

———, 2018, 「水俣に想う」(熊本大学大学院社会文化科学研究科「ケース分析・フィールド演習」授業での提供資料、2018年8月)

Zehr, Howard, 2002, *Little Book of Restorative Justice: A Bestselling Book By One Of The Founders Of The Movement*, Intercourse: Good Books. (森田ゆり訳, 2008, 『責任と癒し——修復的正義の実践ガイド』築地書館.)

#### <主なインタビュー調査>

金刺潤平 2022年11月20日, 2023年9月15日 場所: 熊本県水俣市・浮世雲工房にて

森枝敏郎 2021年8月5日 場所: 熊本県熊本市・喫茶店サンロワール(熊本県庁横)

杉本肇 2023年9月18日 場所: 熊本県水俣市・杉本肇氏自宅にて

高木淳二 2020年9月28日 場所: 熊本県球磨郡水上村・高木富士川計画事務所

吉井正澄 2020年10月1日, 同21日, 2021年3月, 同8月4日, 2023年9月18日  
熊本県水俣市・吉井正澄氏自宅にて

吉本哲郎 2018年8月10日 場所: 熊本県熊本市・熊本大学にて

2021年8月2日, 他 場所: 熊本県水俣市・吉本哲郎氏自宅にて

吉永利夫・吉永理巳子(旧姓: 開田理巳子) 1 2021年11月 吉永氏自宅にて

#### <主な参考映像作品>

西山正啓(監督) 2004, 『のさり 杉本栄子の遺言』